表紙

チベット・アムド地域における村落社会と信仰生活の変容に関する人類学的研究

――中国青海省海南チベット族自治州貴南県ボンコル村の事例から

らぁじゃぶん
拉加本

博士（学術）

総合研究大学院大学

文化科学研究科

地域文化学専攻

令和３年度

（2021）

博士論文の目次

図・表・写真リスト vi

序論 1
1. 本論文の目的 1
2. 本論文の研究史上の位置づけ 6
3. フィールド調査の概要 17
4. 本論文の構成 19

第 1 章　ボンコル村の歴史的概説と村の伝統的社会構造 22
1. 小序 22
2. モンゴル族の青海への移住とチベット仏教ゲルク派の伝播・普及 26
3. 清朝下青海でのチベット仏教 28
4. ラーモ・シャプトン・カルポと寺領の変化 29
5. ボンコル村の歴史的位置付け 33
6. 小結 42

第 2 章　龍羊峡ダムの建設と村落の変化 44
1. 小序 44
2. ボンコル村の現状 45
3. 龍羊峡ダムの建設 48
4. 移転前と後の集落と宗教施設 54
5. 移転後の村の発展と生活の変化 57
6. 小結 64

第 3 章　チベット仏教施設の変容 66
1. 小序 66
2. ツァルナ寺院 68
3. トレ寺院 79
4. チャンツェ・ガルカ小寺 88
5. 考察――三寺院の現状 89
6. 小結 93

第 4 章　チベット化された漢族の文昌神 95
1. 小序 95
2. 歴史史料におけるアニェ・ユラ神 98
3. アニェ・ユラ神を信仰する学僧たち 102
4. ボンコル村におけるアニェ・ユラ神とアリック・ラカン廟 108

5. アニェ・ユラ神の信仰のありかた 120
6. 小結 130

第 5 章　マニ堂とニュンネー儀礼 132
1. 小序 132
2. 村人の宗教活動の場としてのマニ堂 133
3. マニ堂における年中行事 137
4. ニュンネー儀礼 142
5. ニュンネー儀礼の意味と目的 153
6. 小結 157

第 6 章　仏教徒の家庭で行われるボン教のソンワ儀礼 159
1. 小序 159
2. ボン教徒の宗教活動の場「ボンボ御堂」と年中行事 161
3. 在家祭司とソンワ儀礼時の役割 164
4. ソンワ儀礼の解釈とその社会的意味 166
5. 儀礼の主催者 L 家 166
6. ソンワ儀礼の過程 168
7. 小結 196

結論 198

【補論 A】ラーモ系譜にある実績 210
【補論 B】ラプツェ 217

参考文献 221

【用語集】 238
謝辞 244

博士論文全体の要約

論文題目:『チベット・アムド地域における村落社会と信仰生活の変容に関する人類学的研究――中国青海省海南チベット族自治州貴南県ボンコル村の事例から』

著者名：拉加本

本論文の目的は、チベットの伝統的三大地域の一つアムド地域に居住するチベット人の宗教活動の分析に基づき、チベット仏教一辺倒ではない信仰生活の実態を村の生活者の視点から明らかにすることである。この目的を達成するため、中国青海省海南チベット族自治州貴南県のボンコル村という村落社会を調査対象とした。同村は歴史的にモンゴル族などとの交流や影響を受け、龍羊峡ダム建設による村の移転の経験を有する。また、チベット仏教、ボン教、道教由来の神、アニミズム的民間信仰などが一村落において矛盾することなく併存し、複雑に混淆した信仰形態が見られる村である。従来のチベット研究は、仏教史や政治史、仏典や仏教との関わりが深い文学という、いわば「大伝統」に主眼を置きがちだった。これに対して本研究は、チベット仏教以外の民間の宗教活動という従来あまり重視されて来なかった、いわば「小伝統」にも注目した民族誌を書く試みである。

序論では、本論文の目的を示したうえで、チベットの村落社会を研究対象とする場合、「大伝統」と「小伝統」という概念の有効性を再評価し、行われつつ築かれている「実践宗教」の視座を提示しながら、17 世紀に始まるチベット学の歴史をたどり、そのなかに本論文を位置づけ研究課題を示した。

第 1 章では、アムド地域が古くからボン教徒と仏教徒双方及び政治的亡命者にとって辺境の避難所であったのみならず、チベット仏教、ボン教、道教、土着の宗教信仰が併存し混淆してきた地域であることを紹介した。アムド地域における調査地の地理的、歴史的特徴を描くために、ダライ・ラマ 3 世によりアムド地域へ派遣された、ラーモ化身歴代の支配領域を図示しその影響力を寺領の人々の視点から考察した。また、ボンコル村の長老たちの口頭伝承の分析によってボンコル村の始祖と青海モンゴル族との交流史から村の起源を探り、同村の首長の系譜と伝統的社会単位である氏族「ツォワ」（clan）の実態を明らかにした。

第 2 章では、1958 年以降、社会主義政策の影響を本格的に蒙ったボンコル村の社会が、ダム建設（1976 年着工）による村の移転（1987 年）を経てどのように変わったかをインタビューによる聞き取りデータと村人の半農半牧の生計の収入状況から考察し詳述した。村の移転後、半農半牧の生業は不安定で変化し続けたが、2005 年以降、政府からの補償と経済的援助が活発になり、雑貨店や飲食店などが開業しはじめた。こうして新ボンコル村は、中国の社会主義近代化における典型的な「新しい」村落へと変容した。

第 3 章では、ダム建設による宗教施設の移転と村人の仏教的宗教活動の変化を考察した。特にラーモ化身の支部寺院と檀家村の関係はいかなるものかについて論じ、ボンコル村と

周辺の仏教寺院との関係や仏教寺院の機能の変化を記述した。具体的にボンコル村の仏教的宗教活動に深く関わる、(1) 再建し日常的法要の継続に向かったツァルナ寺院、(2) 最新の教育制度及び教理哲学を整え、現在最も発展しているトレ寺院、そして (3) ついに再建に至らなかったチャンツェ・ガルカ小寺という三つの仏教寺院を取り上げた。そのうえで、三寺院それぞれの歴史、再建ないし再建不能の経緯と要因、現在の寺院の機能、寺院と檀家村との関係や寺院の盛衰を比較し検討を加えた。アムド地域の寺院と檀家村は寺領的な関係を持つのではなく、「チョ・ユン関係（説法師と施主関係）」を持ちつつ、それに留まらない並列的ないし相互依存的関係を形成していることを論じた。

第 4 章では、アムド地域の人々がアニェ・ユラと呼ぶ神の神格と起源、仏教とボン教の学僧たちがそれを護法神として扱ってきた経緯を描いた。アニェ・ユラ神は、元々は道教の文昌帝君ないし文昌神である。漢族とチベット族の知識人の間に共通しているのが、文昌神及びアニェ・ユラ神を学問の神と見なしていることであった。他方、ボンコル村の民間信仰におけるアニェ・ユラ神は、雨乞いや雹を防ぐための畑の守護、病気治しや子授け、結婚占いなどを司る万能の神として崇められている。アニェ・ユラ神の由来はあくまで文昌神であり、漢化の一現象と見なされる。だが、アムド地域ではそれをアニェ・ユラ神と名づけ、異なる信仰形態として受容してきたのであり、その点からは漢化とチベット化が同時に進行し併存していると分析した。

第 5 章では、マニ堂という宗教施設に注目し、そこで行われてきた斎戒悔過儀礼をめぐって村人の仏教的な宗教活動を考察した。マニ堂は一般に世俗者の仏教的活動の場であり、アムド地域の村落社会に広く存在する。だが、ボンコル村のマニ堂は単に民間の宗教儀礼を実施する空間ではない。むしろ、そこは大蔵経の保管施設であり、大乗仏教における布薩の八斎戒の厳守を促しその儀礼を正しく実施する、在家男女に開かれた高尚な「世俗」的寺院と言い得る存在である。加えてマニ堂は年中行事に関わる僧侶たちの読経会の場としての機能も果たしている。

第 6 章では、村のボン教徒が集う宗教施設「ボンボ御堂」における宗教活動に着目し、ボンボ御堂内の在家祭司の役割について考察した。特に仏教とボン教の混淆が著しい家庭レベルの儀礼として、仏教に改宗した家庭で行われるボン教的守護神の「ソンワ儀礼」について詳述した。ソンワ儀礼は信者とその生活空間を浄化するもので、穢れや邪悪なものを「身代わりのトルマ」に封じ込め戸外に投げ捨てるなどの儀礼である。彼らはソンワ儀礼以外にはボン教と関わらず、仏教徒がボン教のソンワ儀礼を行う矛盾を感じながらも重要な年中行事の一つと捉えている。

結論ではボンコル村の人々が実践している混淆した信仰生活がいかなるものかを総括し、それがいかに形成され、どのように変化しているかについて分析した。ボンコル村はダム建設による移転により故郷を喪失するという逆境を経験し、移転後も政府の様々な政策に翻弄されてきた。それによりコミュニティの結束は強化され、移転先での集住により日常生活における人々の交流が活発になり、村人の共同的な行事も増加した。近代化の過程で編成された生産隊が、村レベルの年中行事などの宗教活動でも実施単位になるなど、「創られる伝統」と呼び得る宗教復興が起こった。さらに近年活発になった政府からの移転補償金は、村の宗教活動を充実させ、共同的儀礼が行われる経済的基盤となった。故郷

や「伝統」の喪失は、人々を新たな伝統を創ることに駆り立たせ、その関心が宗教活動に向かわせたと結論づけた。

ボンコル村における宗教活動は、道教起源のアニェ・ユラ神信仰、仏教徒の家庭で行われるボン教的守護神のソンワ儀礼、仏教徒とボン教徒が共に祀る山神ラプツェ信仰などから成り立っていた。村人は神々や儀礼の由来や起源などをあまり意識せず、種々の宗教要素を区別することなく取り込み、それらが併存し一部は融合している混淆した信仰を「当たり前」の慣習的行為として実践してきた。本来、帰依対象が根本的に異なる仏教とボン教では、両者が混淆する宗教実践は教義上絶対に許されない。ところが、ボンコル村の人々は同一の神格を「右から見れば仏教徒、左から見ればボン教徒」と二面的に捉えることで教義上の矛盾に折り合いをつけ、両宗教の混淆を正統化してきたのである。換言すると、村人の信仰活動には現世利益を求める民間信仰と、来生の、あるいは一切衆生の救済といった高度な教義を求める信仰という二つの方向性があり、それが矛盾することなく併存し関係しあっていることが、この地域の宗教の混淆性の特徴である。

こうした混淆する宗教現象は多かれ少なかれチベットの村落社会に通底していよう。アムド地域やボンコル村だけが特殊というより、民族や歴史的背景、立地などによって程度の差はあるが、宗教活動の混淆は多くのチベット人村落にける普遍的な現象であり、それは人々にとっては当たり前の慣習的行為で「無名の宗教」であったため、記述されてこなかったのである。